

# 日本資本主義の大転換

セバスチャン・ルシュヴァリエ 著/新川敏光 監訳 岩波書店 3400円+税/239+28ページ

## profile

Sébastien Lechevalier  
フランス・パリにある社会科学高等研究院 (EHESS) 准教授 (日本経済論)。EHESS 日仏財団理事長。1973年生まれ。東京大学、一橋大学、京都大学などで客員研究員を歴任。近年は日本以外のアジアの国々にもリサーチアジェンダを広げている。

02

### 企業システムと その変化に注目

著者 会社学研究者  
奥村 宏

フランスでレギュラシオン(調整)理論に基づいて研究している経済学者が日本資本主義の構造とその矛盾について研究した結果が本書である。そこでは日本資本主義はユニークである、という議論を退け、その構造と変化について論じている。そして1970年代までの日本資本主義は企業組織、調整様式、社会的和解という面で成功していたが、80年代の初頭以降、根本的に変化しており、それは教育システム、イノベーションシステム、国際システムにも関係しているという。

このような変化はグローバル化の進展によるものか、それとも日本特有の現象か、という点で議論が多方面にわたっているためわかりにくい面がある。

ゼーシオン、テクノロジーの進歩、あるいは危機によって課せられた諸問題への対応から生まれたというよりは、80年代初頭から段階的かつ断続的に実行された新自由主義的政策の結果として生じたのだという。

こうして日本資本主義の危機は80年代から起こったのだが、それは制度変化の欠如ではなく、従来のシステムの崩壊と一貫性および調整の欠如から生じた構造的な非調整によって説明できるとしている。

アベノミクスについては、現段階に照応した新しい社会的和解を明らかにしていないから失敗に終わるだろう、ともいう。

日本の企業システムとその変化について論じているだけでなく、さらに教育システム、特に大学のあり方についても詳しく論じているところは興味深い。

# 04

## 無戸籍の日本人

井戸まさえ 著



集英社 1700円+税

現代の日本には戸籍を持たない人が1万人以上いるという。その無戸籍者たちの厳しい現実から、問題が映画、テレビで取り上げられてもなお、解決されない背景まで深く掘り下げたノンフィクションだ。

無戸籍問題と関連があるリ、1世紀以上改正されないままになっている民法の離婚後再婚禁止期間について、先頃、最高裁判所が違

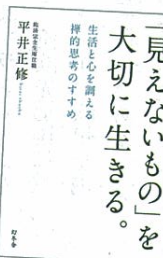
出生届が出されず、存在が行政に登録されない、もしくは把握されないままに生きていく人々。自らの子供も法の規定により無戸籍となった経験を持つ著者が、13年にわたって無戸籍者とその家族たちを支援し続けていく経験を踏まえ、リアルな姿をとらえる。

貧困、虐待、いじめ、所在不明児といった問題にも直接かかわるだけに、まず本書で現実を知ることから始めてはどうだろうか。

# 03

## 「見えないもの」を大切に生きる。

平井正修 著



幻冬舎 1200円+税

大事なものほど目に見えない。見えているものはみな見えないものによって生み出され、動かされている。その見えないものを大切にしないかぎり人生を大切にできない。これが本書のエッセンスだ。政治家や経営者が座禅に訪れることでも知られる臨済宗全生庵の住職である著者が、禅宗の故事成語や体験を織り交ぜ、生きるヒントを語った。「心を空っぽにする」に始まる題材はどれも胸にすっと落ちる。難しい示教もない。「初心忘るべからず」は仕事のみならず生きるうえでも大事なことで老後にも情熱をしばせてはいけない。やるべきは今、目の前にある仕事だ。手柄はうたかた、あぶくのようなもので納得感こそ重要だ。おカネのことは、つねに品位のある稼ぎ方が使い方を考えて行動すれば間違えることはない。「たかが」に心を配れる人はすべてに心を配れる人だ、など説き及ぶる著者の知恵の数々は地位や年齢に関係なく参考になることが多いだろう。(純)